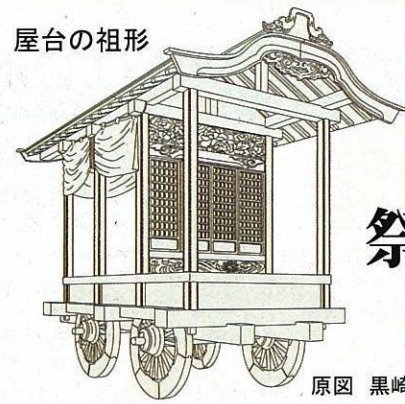


鹿沼宿

祭りのおこりは 民衆から

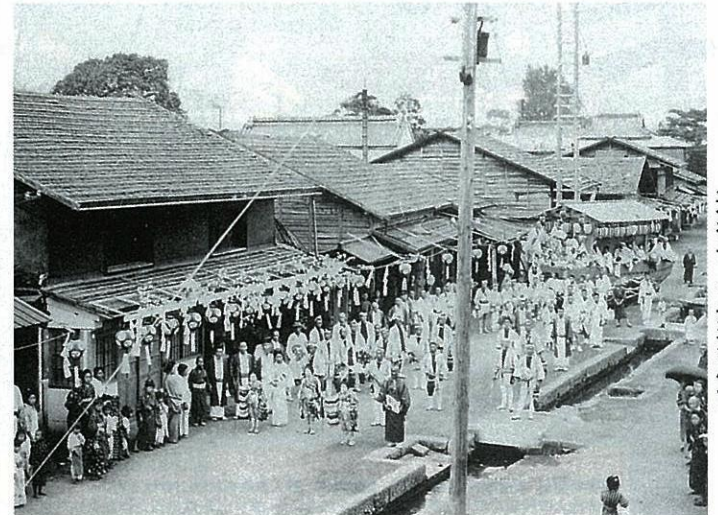


原図 黒崎孝雄氏

慶長十三年(一六〇八年)三月、戦国の世が過ぎ一時荒廃していた鹿沼宿の復興は、今宮神社再建を機に始まりました。この年は、日照りが続き、大旱魃となりました。氏子や近郷の人びとが今宮神社に集まり、雨乞いの祭りを三日三晩続けたところ、靈験あらたかに激しい雷雨がおこりました。この靈験を敬い、雨のあがった六月十九日を宵祭り、翌二十日を例祭とすることになったのが今宮の例祭の始まりと伝承されています。

屋台は当初、氏神への奉納する踊りなどの舞台として移動できる簡単な屋根付の台でした。寛政に入り、付け祭りが盛んになるにつれ、囃子方が屋台の中に入ったこともあり、屋台をつくり替えたり、新屋台をつくる地域も出始めました。

それまでの踊り屋台としての機能は引き継がれましたが、芸場は狭くなり、別に「踊り台」を設けて屋台の前に据え、踊りや狂言を演じるようになりました。このころから屋台は黒漆塗となり、一部を彩色し、現屋台の祖形になったと伝えられています。



大正期の田町通りを
運行する舟形屋台

所蔵 横浜市 金子 元治氏

屋台の祖形

← 大正期の天神町屋台
町内揃つての記念撮影



所蔵 中野 恵夫氏

所蔵 小井田 貞二氏



→ 泉町屋台 年代不明
町内揃つての記念撮影